

# カント哲学とマルクス主義

井 上 周 八

- 一 はじめに
- 二 初期のカント——批判と調和——
- 三 ライプニッツ哲学とカント
- 四 『批判』前期のカント(以上本号)
- 五 『純粹理性批判』のカント
- 六 『批判』以後のカント
- 七 カント哲学の問題点  
——カントの「二元論」と「物自体説」批判——

## 一 はじめに

マルクス主義の三つの源泉の一つとしてのドイツの観念論哲学の主要な哲学者たちといえは、私たちは直ちにカント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲルなどの名を想起する。実際のところ一つの哲学思想のなかにはそれ以前の哲学が含まれているといわれており、この意味でカントやヘーゲルや、さらにはフォイエルバッハのそれぞれの哲学は、それ以前のあらゆる哲学思想の影響が何らかの形で含まれていると言えるのであるから、上記の哲学者たちの哲

学的見解を知るといふことは、事実上、彼ら以前のドイツの全哲学および全西欧哲学の成果を何らかの形で学ぶといふことにもなるであろう。

さて、マルクスはその「学位論文」を完成し、これをもってボン大学で教職に就くことを意図した。しかし、周知のように、彼の友人ブルーノ・パウアーですら教職にとどまりえないという事実遭遇して、マルクスはドイツの諸大学での強い反動化を認識し、その希望を放棄したのであるが、それと同時にマルクスの反動勢力との闘争と新世界観発見への革命的歩みは前進するのである。

マルクスが生まれた一八一八年は、ヘーゲルがベルリン大学で哲学教授として始めての講義をした年であるが、青年マルクスがベルリンに来た頃はヘーゲルは生きていなかったし、もちろんカントやフィヒテも死んでいた。しかし、直ちに想像しうるのは、青年マルクスがその若き日からの特徴であった徹底的に学習するという性格をもって当時の哲学思想を研究したであろうということ、および全身の情熱をもってプロイセンの絶対主義的反動との闘いに当たったであろうということである。

一八四二年一月に、マルクスは時局的な政治的テーマに坎する彼の最初の労作を発表した。『プロイセンの最新の検閲訓令にたいする見解』という論説がそれである。この論説で彼は、「学位論文」でもみられるように一八四一年中にでき上がってきた革命的民主主義的立場にもとづいて、プロイセンの絶対主義的王制とそのイデオロギーたちにたいする戦端を開いたのであり、具体的な政治的諸問題との対決を『ライン新聞』紙上でおこなった（一八四二年四月から一八四三年三月まで）のである。この新聞は当時の進歩思想の宣伝の演壇となり、そして一八四二年一月以後は彼がその直接的な指導を行ない、ますますはっきりと革命的民主主義的な傾向を明確にした。

マルクスはプロイセンの厳しい検閲下にもかかわらずその論説で当時のライン州の封建貴族と大地主の反動的支配に対する闘争を行なった。そしてこの闘争の過程で、マルクスは次第にブルジョア社会の階級性の認識にめざめた。マルクスは彼の最初の戦闘である出版の自由の擁護ならびに搾取され貧しく働く人々の利益を守るために闘う過程で常に人民大衆の立場に立った。

マルクスが最初に遭遇した経済問題に対する発言は周知のように抑圧されて搾取されている農民の困難な状態を分析している代表的論文『木材窃盜取締法にかんする討論』である。この論文のなかで彼は「たんなる政治から経済的状态へ目を向けていくように悟らされて社会主義に到達」(全集、第三九卷、四六六「原」ページ参照)したのである。

こうしてマルクスは唯物論と共産主義の方向に向って歩みはじめるのであるが、それは同時にヘーゲル法哲学への批判への道でもあった。そしてこのヘーゲル哲学批判にあたって、マルクスに大きな影響を与えたのは、フォイエルバッハであった。しかし、にもかかわらず周知のようにマルクスの唯物論は根本的にフォイエルバッハの抽象的観念的唯物論とは異なっていた。

一八四二年当時のマルクスにとって重要だったことは、彼がライシ州の政治運動に強く関係しつつある一方で、ドヴィヒ・フォイエルバッハの哲学的見解を知ったことである。マルクスはフォイエルバッハの著書『キリスト教の本質』(一八四一年)を耽読した。この本でフォイエルバッハは封建階級の宗教的イデオロギーを鋭く批判し、ヘーゲル哲学の個々の側面を批判的に発展させたりしたただけではなく、いっさいの宗教ならびにヘーゲルの観念論全体が、世界の真の本質および人間の尊厳ともあいられないものとして徹底的に批判を加え、世界や人間にとって神とか絶対精神はなんら必要としないことを宣言した。彼は自然、存在、物質が本源的、一次的であり、これらは人間の意

識とは独立してあるものであり、この世界には自然と人間以外の何物も存在せず、神とか宗教は人間の産物であり、神が人間をつくったのではなく、人間が自己の人間的な像に従って神をつくりだしたものであることを主張した。

フォイエエルバッハのこの革新的主張は当時のドイツの進歩的インテリゲンチヤに深刻な影響を与えた。よく引用される言葉であるが、後年エンゲルスは次のように回想している。「この本の解放の働きというものは、それをみずから体験した人でなくては、想像することさえできない。感激は一般的であった。われわれはすべて、たちまちフォイエエルバッハの徒になつていた」〔ルードヴィヒ・フォイエエルバッハとドイツ古典哲学の終結〕、全集、第二巻、「原」二七二ページ。

ところでこのフォイエエルバッハが批判したヘーゲルからマルクスが特にその弁証法を学びとつたことは周知のことであり、はじめヘーゲル哲学に反対していたマルクスがヘーゲルの説を肯定しはじめたのは彼が十九歳の時であった。そのころのものとしてはただひとつ残っている一八三七年十一月付のマルクスの手紙がこのことを証明している。マルクスはそこで父に向つて「なによりも哲学と格闘したい衝動を感じた」と告白している。彼はそれまでカント、フィヒテ、ヴォルテール、ルソーなどの影響をうけた観念論者であつたが、次第に現実に目を向けるようになり、現実のなかに理念を求めるようになった。<sup>(1)</sup>

「ところが生きた思想世界の具体的な表現、たとえば法、国家、自然、哲学全体においては、対象そのものがその発展において見まもらなければならない、恣意的な区分がもちこまれてはならず、事物そのものの理性は、自らのなかで抗争するものとして回転しつづけ、自らのなかで統一を見いださなければならないのです」という手紙の一節に明白に後年のマルクスの思想がみられる。彼は「ついでにいえば、私がカントやフィヒテのものと比較したうえて心

につちかってきた観念論からして、私は現実的なものそのものなかに理念を求めるようになりました。神々は以前には現世の上に住んでいたとすれば、いまでは現世の中心になつてゐるのです」と述べ、「……私は現代の世界哲学にますます強く自分を結びつけました」と述べているのであるが、ここには青年マルクスがヘーゲル哲学へ移行しつつあることが示されている。

(一) パリ時代の四四年八月、マルクスは、当時イギリスからドイツへの帰途パリに立ち寄つたエンゲルスと会い、世界観がともに一致していることを確認した。そしてまず両者の共同作業として、当時なお批判意識が現実の歴史を变革するとして、ますます主観主義に陥り大衆と離反していった青年ヘーゲル学派のパウアーに対する批判として『聖家族——批判的批判の批判』(Die heilige Familie, oder Kritik der kritischen Kritik, Ffm., 1845) を出版した。この中でマルクスは「理念は、けつして古い世界の状態をこえて外にすることはできず、古い世界の状態にかなする理念をこえて外にできることだけである。理念は一般に何ものをも成就することができない。理念を成就するには、実践的な力を行使する人間を必要とするのである」と述べ、「歴史とは、自らの目的を追求している人間の行為でしかない」と述べている。

このようにマルクスはフオイエルバッハに心酔し、そのフオイエルバッハの批判したヘーゲル哲学から多くを学んだのであるが、そのヘーゲル自身も彼の独自の哲学を確立する以前にはカントに深く共鳴、心酔していたのである。

## 二 初期のカント——批判と調和——

こうしてマルクスはマルクス主義の二つの源泉のひとつといわれるドイツ古典派哲学から多くのものを継承したのであるが、以下、カント哲学の本質とマルクス主義からのカント批判、カント哲学の問題点などについて学ぶことにする。

ヘーゲルのカントとの出逢いについて中塾肇教授は次のように述べている。

「フランス革命とともにテュービンゲン時代のヘーゲルの心を圧倒したのはカントの哲学だった。『純粹理性批判』の第二版はヘーゲルが大学へ入る前の年に、『実践理性批判』は入学の年に出版された。また彼が修士マギステルになった年に『判断力批判』が、そして大学卒業の年にカントの宗教哲学である『単なる理性の限界内における宗教』が出た。これから数年経つか経たないうちにカントを超え、カントを批判することになるヘーゲルではあるが、学生時代にはすっかりカントの思想に心酔しており、この傾向はベルン時代にも及ぶのである。

彼はカント哲学を、現実政治におけるフランス革命に匹敵する思想界の革命と考え、学友とともに熱心にこれを研究し、それを武器にして大学教授たちの古めかしい神学理論を批判した。実際、「カントの哲学体系とその最高の完成から、ぼくはドイツにおける革命を期待しているのだ」という言葉が、ベルンに移ったヘーゲルがシェリングに宛てて書いた手紙の中に見られるのである。

確かにカントの思想は単に啓蒙主義の完成というだけではない、ある革命的な意義を持ち、それによって思想界に衝撃を与えた。認識というものは、結局において人間の主観が客観を構成するところに成り立つのだという『純粹理性批判』の立場（これがもっと進むと、世界は自我によって生産されるというフイヒテの思想になる）から前進して、認識の対象である現象の彼岸に道德の世界を構想し、その基礎に絶対的な自由とそれに基づく自律的な人格の尊厳を確立した『実践理性批判』の根本思想は、近代市民社会を育て上げたヒューマニズムの哲学的な定式化と言えるであろう。だからハイネが言うように、独断論を攻撃し転覆したカントの批判主義の舌鋒は、バステイーユ襲撃のように激烈なショックを思想界に与えたのである」(『ヘーゲル』、中公新書、一九六八年一月、四一―二ページ)

カント (Immanuel Kant, 1724~1804) は一七二四年四月二二日、東プロイセンの都市ケーニヒスベルグ (現在のソ連領カリーニングラード) の一馬具職人の第四子として生まれた。当時この都市はドイツ敬虔主義の有力な中心地の一つであり、カントの母もその熱心な信者であり、カントは幼少時から、宗教的雰囲気のなかで生長した。

カントの母はインマヌエルの才能を早くから認め、彼女の宗教上の指導者である「フリードリヒ学院」の校長シュルツ師に息子を托し、一七三二年に八歳のカントを同学院に入学させた。

この学院に八年在学したのち、十六歳になったカントは一七四〇年にケーニヒスベルグ大学に入学し、ここでライプニッツ・ヴォルフ哲学を学び、またニュートンの『自然哲学の数学的原理』(一六八七年)を学んだ。そしてのちにカントはラプラス説とよばれる仮説を打ち出した。その後一七七〇年ごろからカントはライプニッツ・ヴォルフ説から離れ、かれ自身の批判哲学を形成する途を歩み出したのである。<sup>(2)</sup>

(2) ここでカントの極く簡単な年譜を示しておこう。

一七二四年四月二二日、ケーニヒスベルグに貧しい馬具匠の第四子として生まる。

一七三二年(八歳)、敬虔派牧師の管理するフリードリヒ校に入学。

一七三七年(一三歳)、一二月、母アンナ・レギーナ死す(四〇歳)。

一七四〇年(一六歳)、ケーニヒスベルグ大学に入学。ヴォルフの哲学、ニュートンの自然科学を学ぶ。

一七四六年(二二歳)、三月、父ヨーハン・ゲオルグ死す(六二歳)。大学卒。卒業論文「活力の真の測定に関する所感、ならびにライプニッツ氏その他の力学者がこの論争において用いたもろもろの証明の批評、附、一般に物体の力に関する若干の先行的考察」

一七四七年(二三歳)、牧師アンデルシュ家の家庭教師としてリタウエンのユッチェンに赴任。八年間の家庭教師のはじまり。

一七五〇年(二六歳)、ヒュルゼン家の家庭教師に転じ、グロース・アルンスドルフに移る。

- 一七五四年(三〇歳)、家庭教師の生活を打ち切ってケーニヒスベルグに帰る。「地軸論」、「宇宙老衰論」を発表。
- 一七五五年(三一歳)、いわゆるカントーラブラスの星雲説の提唱を含む「天体の一般自然史および理論」を発表。次いで「火に関する若干の考察の略述」を大学に提出してマギステル(修士)の学位を得、九月、「形而上学的認識の第一原理の新しい解釈」によって母校の私講師の地位を獲得。
- 一七五六年(三二歳)、地震に関する三つの論文、「地震の原因について」、「地震における極めて注目すべき出来事について」、「純地震論」、および「物理学の单子論」、「風の理論の解明のための新しい観察」を発表。
- 一七五七年(三三歳)、「自然地理学の講義草案」を発表。
- 一七五八年(三四歳)、「運動および静止の新説」を発表。
- 一七五九年(三五歳)、「オプティズムに関する若干の考察の試み」を発表。
- 一七六二年(三八歳)、「三段論法に四つの格を区別するのはこまかきに失すること」を発表、「自然神学および道徳の根本原理の判明性に関する研究」をヘルリン・アカデミーの懸賞応募論文として送る。
- 一七六三年(三九歳)、「神の存在の論証のための唯一の可能な証明根拠」、「負量の概念を哲学に導き入れる試み」を発表。
- 一七六四年(四〇歳)、プロイセン政府よりケーニヒスベルグの詩学教授に任命されたが、これを辞退。「自然神学および道徳の根本原理の判明性について」、「美と崇高の感情に関する考察」、「頭脳の疾患についての試論」を発表。
- 一七六六年(四二歳)、ケーニヒスベルグ王立図書館副司書館に任ぜられる。住居をマギステルガッセより書肆タンテル宅に移す。「視霊者の夢」を発表。
- 一七六七(四三歳)、マルクス・ヘルツ入門。
- 一七六八年(四四歳)、「空間における位置の相違の第一根拠について」を発表。
- 一七六九年(四五歳)、エルランゲン大学およびイエーナ大学より招聘されたが、いずれも辞退。
- 一七七〇年(四六歳)、ケーニヒスベルグ大学正教授となる。就職論文「感性界および叡智界の形式と原理について」を発表。
- 一七七五年(五一歳)、「人類のさまざまな種族について」を発表。
- 一七七六年(五二歳)、哲学部長になる。「愛の学校に関する論稿」を発表。
- 一七八一年(五七歳)、『純粹理性批判』完成。



- 一七八三年(五九歳)、「学としてあらわれうるであろう将来のあらゆる形而上学への序説」を發表。
- 一七八四年(六〇歳)、プリンツツェツシン街にはじめて自邸をもつ。「世界市民的意図における一般史の理念」、「啓蒙とは何か、の問いに答える」を發表。
- 一七八五年(六一歳)、「ヘルデル著、人類史の哲学草案、の批評」、「月における火山について」、「書物複製の不法について」、「道德の形而上学」、「人種概念の規定」を發表。
- 一七八六年(六二歳)、ケーニヒスベルグ大学総長となる。「人類史の憶測的起源」、「思考の方向を定めるとはどういうことか」、「自然科学の形而上学的基础」を發表。
- 一七八七年(六三歳)、『純粹理性批判』第二版改訂出版。
- 一七八八年(六四歳)、再び総長に就任。『実践理性批判』、「哲学における目的論的原理の使用について」を發表。
- 一七九〇年(六六歳)、『判断力批判』、「純粹理性のあらゆる新しい批判は古い批判によって不必要とせられると称する人々の論拠をなす一つの発見について」を發表。
- 一七九一年(六七歳)、「弁論論におけるあらゆる哲学的な試みの失敗について」を發表。フィヒテの訪問を受ける。
- 一七九二年(六八歳)、「人間性における根本悪について」、「人間にたいする支配権をめぐる善き原理と悪との闘争について」、「悪にたいする善き原理の勝利と地上における神の国の建設」、「善き原理の支配下における奉仕と似而非奉仕について」、あるいは、宗教と僧侶階級について」を執筆。
- 一七九三年(六九歳)、前年執筆した完教に関する四編をまとめ、『単なる理性の限界内における宗教』と題して公刊。「それは理論としては正しいかもしれぬが、実際には役にたたない、という常套語について」を發表。老衰を嘆きはじめる。
- 一七九四年(七〇歳)、「月の気象に及ぼす影響について」、「万物の終り」を發表。一〇月、宗教に関し箴口令を課せられる。
- 一七九五年(七一歳)、「永久の平和のために」を發表。
- 一七九六年(七二歳)、七月二三日、最後の教壇に立つ。「魂の器官について」を發表。
- 一七九七年(七三歳)、「法学の形而上学的基础」、「徳論の形而上学的基础」を發表。
- 一七九八年(七四歳)、前年の二書を合して『道德の形而上学』と題して公刊。「諸学部争い」、「實際的見地より見たる人間学」を發表。

一八〇〇年（七六歳）、『論理学、講義のための教科書』（エーンシェ編）を公刊。

一八〇二年（七八歳）、『自然地理学』（リンク編）を公刊。

一八〇三年（七九歳）、『教育論』（リンク編）を公刊。老衰つゝのる。

一八〇四年（八〇歳）、二月一二日午後一時歿。生涯結婚せず。

カントは周知のようにドイツ古典的観念論の創始者といわれているがレーニンは「カント哲学の根本的特徴は、唯物論と観念論を調和させ、両者を妥協させることにある」と述べていた。ではどのように妥協させようとしたのか。

カントの哲学は、前述のようにドイツ哲学の先駆者であり、微分・積分の発見者として有名な数学者、自然科学者、政治家、法律家、歴史家であるゴットフリード・ヴィルヘルム・ライブニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646~1716) の、そしてこれを体系化して組織的に解説したヴォルフの、すなわち「ライブニッツ||ヴォルフ学派」の哲学のうえに立っていた。がまた同時にカントは、その恩師にあたるマルチン・クヌツェンの影響をうけてニュートン物理学の熱心な研究者でもあった。

クヌツェンは物質と精神との関係をライブニッツ流に神の予定調和說的にみることはせず、ニュートン物理学に基づいて、物心両者の間の直接的な物理的、機械的な相互関係に求めようとした。カントはこのクヌツェンの考えを継承し、その大学卒業論文も「活きた力の真の測定」を考察した自然科学をテーマとしていた。すなわち『活力の真の測定に関する考察、及びこの論争においてフォン・ライブニッツ氏並びにその他の力学者が用いた証明法の判定。付、物体の力一般に関する若干の考察』という物理学乃至自然科学に関する論文がこれである。この論文には、カント哲学の特徴である冷静な批判精神が既に示されていた。カントはこの論文の「序文」で、紀元前五年から、紀元後

六五年に生存したローマのストア哲学者セネカの論述『幸福な生について』からの次の引用、「何よりも大切なことは、家畜のように先を行く群れに盲従して、行くべき所ではなく行かされる所へついて行くことをしないことである」をかかげ、「序言」を次のように書き始めている。

「本書の公刊によって色々世人の批判を受けるであろうが、私が自由に偉大な人たちに異論を唱えても、それが罪のように見なされることはないと考えて当然だと私は信じている。かつてはそのような不遜な企ては、きわめて恐るべきこととされた時代があった。けれどもそのような時代はもはや過ぎ去り、人間の悟性〔考える働き〕は、かつては無知と驚きとによって縛られていた拘束から、幸いにもすでに解き放たれている。今日ではニュートンやライプニッツの名声といえども、もしそれが真理の発見を妨げるものをなすとすれば、敢えて大胆にこれを無視することが許され、悟性の赴くところ以外は、いかなる他の説得にも聴従すべきではないのである。」

そして続いてカントは、ライプニッツやヴォルフ、更にはスイスの数学者であったヤコブ・ヘルマン（一六七八一—一七三三）、力の研究についてすでにその成果を発表していたバーゼル大学のヨハン・ベルヌーリ（一六六七一—一七四八）ヴォルフ学派の重鎮で、ペテルブルク大学やチュービンゲン大学の教授であったビルフィンガー（一六九三—一七五〇）等の碩学の名をあげ、「たとい自分がこれらの人々の考えを斥けて自分の考えが優れていると主張しようとも、私はそれらの人々が依然として優れた審判者であられることを望むであろう。なぜならそれらの人々の判断が私の考を非難するものであったとしても、何ものをも恐れない自由な私の批判の意図については、これを咎められることはなからうと私は信ずるからである。これらの人々に捧げ得る最大の賞讃とは、それらの人々の意見は別と違うのではなくそれらの人々の意見をも含めてあらゆる意見を、憚ることなく非難できることにほかならない」とのべ、自分を咎め

る相手をも、すべての人間のあらゆる自由を尚ぶ立場から非難しない襟度の例として、紀元前四世紀末に出たギリシアのコリントの將軍ティモレオンの次の言葉を引用している。

「この種の襟度は、これとは別の機会においてはあつたが、或る古代の偉人について非常に賞讃された。ティモレオンは、彼がシュラクサイの自由のために果した功績にも拘らず、かつて法廷に召換された。裁判官はその告発者の身の程知らずを激怒した。けれどもティモレオンはこの不慮の事件を全く別様に考えたのである。自分の祖国をその最も完全な自由のうちに見ることを自分の全き満足とする者にとって、このような企てが不興であるなどということはありません。彼は、彼自身に反抗する自由を行使する人々をすら擁護するのである。古代の人々はすべて、この態度を賞讃の辞を以て伝えた。」

高峯一愚教授はこの卒業論文の「序言」について次のように評価している。この序言は、「言葉を尽くして、既成の学説、特に屢々ライブニッツの名が挙げられて、そのような既成の学説に拘束されて新しい思想の形成が疎かにされてはならないことを屢々強調しており、若いカントの、これから学界に飛翔しようとして自由を希求する気負いの溢れているのを感じさせ、人によっては、本文以上にこの短い序言におけるカントの大胆率直な自己表明の意義を強調するカント学者もある程である。その主張は要するに、カントがその哲学の本質として目指したところの、すべてに対する『批判』的態度の強調に収約され、それはまさに、カントが後年、名著『純粹理性の批判』の序で『新しい学問の到来の時代』を語った箇所に特に注を付し、『現代は真の意味で批判の時代である。一切は批判のもとにおかれざるを得ない。宗教はその神聖性によって、立法はその尊厳性によって、通常この批判を免れようとする。けれどもその場合には、宗教も立法もみずからに対する当然の疑惑を呼び起すのであり、純真な尊敬を要求することはでき

ない。理性は理性の公明正大な吟味に耐えることのできたもののみ、この純真な尊敬を捧げるのである』(IV)と言った精神にまで一貫するものである。『カント講義』論創社、一九八一年四月、三八―四一ページ)

更に高峯教授はカントの卒業論文の内容について次のように要約されている。

「そしてここでカントが実際の課題として取り上げた問題は、従来対立して争われてきていた物体の力の測定に関するデカルト説とライブニッツ説との調停の試みであった。デカルト(一五九六―一六五〇)は物体を延長として理解していたから、その立場に立って、一六四四年に出した『哲学原理』で、物体の力の測定をこの物体の質量と速度との積を以て表わした。これに対してライブニッツは、物体を力として説明しようとしたから、彼は一六八六年に発表した論文で、物体の力は質量と速度の二乗との積  $m \cdot v^2$  として表わすべきだとした。したがってカントがここで『二派に分れて互いに全く相反する意向を主張する聰明な人たち』と言っているのは、このデカルト派とライブニッツ派との物体の力の測定についての対立を言っているのである。しかし当時はまだ物体の『力』という意味が厳密に規定されておらず、それぞれが勝手な意味にそれを用いて論じていたために、互いに対立の生ずることも止むを得ない事情をなしていた。したがって、この問題については、すでに一七四三年、カントの卒業論文の年よりも三年前に、フランスの数学者グランベール(一七一一―一七八三)が『力学論』を出して、デカルト説の  $m \cdot v$  は物体の運動量を、ライブニッツの  $m \cdot v^2$  は誤りだが、 $\frac{1}{2} m \cdot v^2$  は物の活力すなわち仕事の量を表すものであるとして、解決が与えられていたものであった。

カントはこのグランベールの解決を知らなかったために、その緒言における気負った意気込みにも拘らず、論文自体は、物理学上の諸概念の分析も十分でなく、グランベールに及ばない失敗作に終り、後にレッシング(一七二九―

八一）によって、『カントは活力を測ったが、肝心の自分の力を測らなかつた』と揶揄されるところとなつた。しかしそれにも拘らず、カントがそこで試みた『二派に分れて互いに全く相反する意向を主張する聰明な人たち』の間に立って、単にいずれか一方だけに全面的に荷担するのではなく、両者を共に、それぞれその認められ得る範囲、限界内において認めようとする解決の仕方は、ちょうどグランペールが、従来曖昧のままに論議されてきた物体の『力』の概念を、明確に区別することによって、それぞれその当てはめ得る場合を明かにしたのと全く同様であつて、すべての問題に関してこのような解決の仕方を試みるこそ、カントが『批判』的方法として、後年、彼の哲学の根本的態度としたところのものであり、その明かな萌芽のすでにこの処女作に示されていたことを私たちは注意しなければならぬ』（同上、四二―三ページ）

卒業論文執筆後カントは、一七四七年から五五年に至る約八年の間、ケーニヒスベルグ近郊の二、三の上流家庭で家庭教師をしながら勉強を続け一七五五年に、彼の自然科学的論文の中で最も重要な位置を占める「天体の一般自然史と理論、別名、全宇宙の構造とその力学的起源に関するニュートンの原則による研究」を出版した。この序文でカントは次のように述べている。

「私は全世界の物質を全般的に分散しているものと仮定し、この分散状態から一個の完全な渾沌状態をつくつてみよう。私は既成の引力の法則に従つて素材が形成され、斥力によってその運動が変容させられるのを見る。私は、任意の虚構の助けを借りないで、既定の運動法則に導かれて一つのよく秩序づけられた全体が生み出されるのを見て満足に思う。この全体は、われわれが眼前に見出すのと同じ世界体系に似た様子をしているので、私はそれを宇宙体系と同じものと思わざるを得ない。……しかし、ついに私は、前述の考察に基づいて、自然のこのような展開が、何か

未聞のことではなく、自然の本質的努力がそのような展開を必然的に伴うものであるということ、そしてこのことは自然が根源的存在者に依存するものであることの最も輝かしい証拠であり、この根源的存在者は諸存在者自身とその最初の作用法則との源泉をすら自己のうちにも有するものであることを教えられるのである」

ここにはレーニンが指摘しているように観念論と唯物論との、すなわち神(最高の根源的存在者)とニュートン物理学との調和をはかるカントの考えが示されている。ここでカントはニュートンの自然観を取って宇宙の発生を機械論的に説明しようとしながら、他方この宇宙の法則の根底に創造の目的があることを認め、ライプニッツ・ヴォルフの形而上学と機械論的自然観との調和統一を図っている。

太陽系の生成、すなわち星雲から太陽、諸惑星にいたる発生についての「カント＝ラプラス説」について、エンゲルスはこの仮説に大きな哲学的意義を認め、カントが発展を否定する形而上学的世界観に始めて突破口をつくったと評価している。

カントは同じく一七五五年に、『形而上学的認識の第一原理の新解釈』という論文により、ケーニヒスベルグ大学の私講師となり、彼の長い教授生活を開始した。カントの講義はきわめて評判が良く、しかも学問的精神の高さを示すものであり、その講義内容は数学、物理学、論理学、形而上学、道徳哲学、地理学、自然法、教育学等々のきわめて多方面にわたるものであった。彼はこの私講師の生活を十五年間続けた。そして、一七七〇年三月、カントは教授に就任することができた。この間彼は、着々とその業績を発表したがその主要なものは、ベルリンのアカデミーの懸賞論文に応募して第二位を占めた『神の存在の論証に対する唯一可能なる証明根拠』、『自然神学および道徳の原則の判明性についての研究』、および一七七〇年正教授就任の際の就任論文『感性界および叡智界の形式と原理について』

などである。

この頃カントはようやく彼が年来支持してきた伝統的形而上学、すなわちライプニッツ理論に対する疑惑を深め、その反動として一時、経験論的立場に傾いたが、そのご更にそれをこえて批判哲学への道を徐々に歩みはじめたのである。

カントは後年『純粹理性批判』の第二版の序文で次のような意味のことを述べている。

かつては形而上学がすべての学問の女王とよばれていた時代があったが、今や形而上学に対してあらゆる侮蔑を示すことが時代の流行となつてしまった。これは形而上学が数学や自然科学のように学問としての確実な道を歩んでおらず、独断的であるからである。形而上学をこのような状態から救出し、これを学問としての確実な路線にのせるためには、私たちは理性のあらゆる任務のなかで最も困難な仕事である「自己認識」に着手し、これによって形而上学一般の可能なことと不可能なことをはっきりさせる必要に迫られている。こうした仕事こそ、私がいま「純粹理性批判」という名のもとに試みようとしている仕事にほかならない。

ここでカントが「形而上学」とよんでいるのは、アリストテレスに淵源をもち、アリストテレスが「第一の哲学」とよんだ学問であつて、「存在そのものの原因」、「永遠の神」、「靈魂」、「理想」、「意志の自由」などといった超經驗的、超經驗的なものごとについての学問を指している。人類はその発展の或る段階において、世界とは何であり、世界における人間の生き方はどのようなべきかという智識を追求するにあつて、科学的真理と矛盾する超經驗的な形而上学的思索を展開せざるを得なかつたが、カントの青年時代において流行していたライプニッツ・ヴォルフの合理論的形而上学もその一つであつた。カントは当初、ライプニッツの形而上学をうけいれていたのであるが、『純



『粹理性批判』におけるカントは、長い間の思索のちこのような形而上学が学問として成立するか否かについて原理的に再検討し、彼の批判哲学を世に問うことになった。

### 三 ライブニッツ哲学とカント

ではライブニッツ哲学の内容はどのようなものであったのか。ライブニッツは一つの世界観を構想したが、それは哲学であると同時に一つの宗教的思想でもあり、哲学と宗教の融合した形而上学的な世界観であった。

田中英三教授は著書『ライブニッツの世界の宗教哲学』（創文社、一九七七年）の序文で、ライブニッツの思想の基調の一つとして、「神が被造物に向かって開いて来た世界において、両者は相会し呼応しながら共同の目的を実現すると考え、この調和的な共働の内に世界が持つ限りなく豊かで深い意味を汲み取ることが、多方面に及ぶ活動へライブニッツの情熱を燃えたぎらせた」という解釈を述べられている。つまり予定調和説とこれに結びつくオプティミスムである。

ライブニッツの神による予定調和説はモナドロジー *monadologie* ともよばれる。モナドは拡がりも形もたない不可分の物質および非物質的なものの実体である。全宇宙はこのモナドの合成体である。モナドの作用は表現であり、最高のモナドは神、最低のモナドは物質であり、この精神界と物質界は連続的である。モナドは神の意志によるのみ創造され消滅される。それぞれのモナドはその内部の法則により自己発展し、小宇宙を形成しており、モナドは相互に独自の対応関係を結び、これら全体が神の意志によって予定調和されて存在する。このようなライブニッツの単子論的形而上学は、一元論であると同時に多元論的であり、また機械論的であると同時に目的論的である。モナド説

はしたがって原子論とも全く異なる。

ここで合理主義的哲学といわれたライプニッツの哲学内容の大綱について森宏一教授は以下のように述べている。

「ライプニッツは実社会にも大きく接触し、かつ自然科学の諸知識を深くいだいていたが、哲学者としては観念論者であり、宗教の擁護者としてふるまった。……かつてイタリアのブルノーが、世界の基本的要素を『モナド』として立てたが、この『モナド (Monad 单子)』をライプニッツは精神的な存在にとらえ、これは活動的、力動的な性格をそなえているものであり、こうした活動する力はそもそも物質的なものとしてみとめられないとした。ここには、物質はそのままの状態では無活動で、なんらの運動もしないという考えがひそんでいる。すなわち、ライプニッツにあっては、力動するところの精神的なモナドが世界における実体なのであり、これは無数に存在するとして、実体の多元を主張する多元論をその立場にしたのである。こういう見解を、とくにかれの著作『モナドロジー (单子論)』(一七一四年)で説いている。

……世界はこれら多くのモナドなる実体からできており、物質としてではなく力動としての、すなわち精神的なこれらのモナドは、みずからの精神的働きとして表象作用をもつとともに、この作用には程度のうえで差異があり、混沌としても物質の状態にあるものであり、それが感覚や記憶をもつものへと高まり、さらに魂とか精神という状態をへて、もっとも明瞭な表象状態にいたった完全なモナドにいたる。このモナドが、すなわち神なのである。……

……世界は最高、完全なモナドである神からの流出であり、その創造だというのが、ライプニッツがみるところである。そして、この完全な最高のモナドからすれば、それ以下のものはすべて有限な不完全な状態におかれている。このことが、世界に欠陥があり、悪や不幸の生ずる源とされるのであるが、しかし神は世界を創造するにあたって、

どのような世界をつくるかはその自由にぞくすることではあるにしても、神はこの世界をもっともよきものとして創造した。これが、ライプニッツのオプティミズム (Optimism 最善観また樂天觀) といわれるものであって、現実世界に悪や不幸があることをみとめながらも、なおかつ神の恵みをそこに承認しようとした試みである。

ところで、すでにみたようにモナドには、その表象能力の差からたんに物質状態にあるとみなされるものからはじめて、さらに高い発展にたつた状態へ移行するので、ここに、無生物が生物へ、植物や動物の発展としての関連とあった、存在するすべてのものの関連と発展の見解がしめされている。このように、いわば弁証法的な発展をみているものの、かれによれば、世界には飛躍というものはないとされて、すべては一系列の連続としてだけみなされるといふ『連続律』なるものが説かれている。

認識論の問題でいうと、かれは真理に二種類を区別した。すなわち一方には、論理学における矛盾の法則にしたがって成立するもの、矛盾がないことによるもの——数学がそれにあたる——は、『理性の真理』であり、これは論理の必然性から生まれるのであるが、他方では経験をもとにして生まれる真理は、前者にくらべると偶然的なものであって、こういう経験からえられる知識に真理という資格をあたえるのは、しっかりした理由がしめされてその成立が証拠だてられる場合である。つまり、論理学の理由の法則で基礎づけられるものである。そこで、このほうは『事実の真理』といわれる。自然科学がしめす真理は、この事実の真理にぞくする。このような考えから、ライプニッツと同時代のイギリスのロックが、経験をもとにして知識の成立を説いたのに反対して、かれは理性そのものによる真なる知識 (理性の真理) が成立することを主張して、あたかもデカルトが『生得観念』をみとめたような、観念論的で合理的な認識がなりたちうるとしている。

そのほかに、かれは広く科学的認識を基礎づける思考の本質を明らかにして『普遍的科学』なるものをつくりあげようという構想をももち、そこから記号論理學を考察する試みをおこなった。

総じてライプニッツの業績をみると、一方では科学について大きな関心をしめしながら、他方では従来通りキリスト教をまもって観念論的な世界解明をおこない、神の世界創造、その神によって創造された現象世界に否定しがたく存在する悪・不幸の問題を弁明するにつとめるといふ保守性が並存していた。『哲学とは何か』、一七一一―四ページ）

このようなライプニッツの哲学は唯物論と観念論の混在した哲学であり、弁証法と形而上學の併存した哲学である。

またソ連哲学の成果である『哲学小辞典』（岩崎書店）には次のように述べられている。

「ライプニッツによれば、自然の基礎をなすものは、自主的な精神的（観念的）実体たるモナドであつて、このモナドは可動的・活動的であり、一切の物・一切の生命の基礎である。モナドは能動力であり、物質はこの力の出現したものの、モナドの精神的本質の他在である。それは主要な一切を包含するモナドたる神の創造の結果発生する。モナド相互間の関聯は上から予定された調和を形成する。従つて、それは世界の最良のうち益々良いものへ向うものである。……無機世界は低級モナドの結合したものである。人間は高級モナドの結合せるものであつて、それは現実の明白な表象と理解を有するものである。このように、一切の自然は有機的である、ライプニッツによれば、生なき自然は存在しない。」

ライプニッツにあつては、モナド學説において、観念論・形而上學（モナドの超自然的發生）と、物質の内的運動と（モナドを通ずる）生命の一切の發現形態の相互関聯に関する弁証法的観念とが絡み合っている。レーニンはこの点に

ついで次の如く指示している。即ち『ライプニッツは神学を通じて、物質と運動の不可分の（普遍的な、絶対的な）聯関の原理に到達した』。しかし乍ら、ライプニッツは、それと共に、発展の連続性に関する機械論的原理を發展せしめ、飛躍を否定し、物理的運動法則を神学に従属せしめた。

認識論においては、ライプニッツは唯物論と経験論とを和解せしめんとし、経験論の周知の命題——『感性には何も存在しないように、知性にも何も存在しない』——に對し、彼は『知性自体以外には』と修正を加えている。以上のように、かかる妥協は唯理論に基づいてライプニッツによってなされたものである。

数学の部門においては、ライプニッツの役割は極めて大きい。ニュートンとは別個に彼は微分・積分（無限少の分析）を発見した。これは、エンゲルスが指示しているように、自然の状態ばかりでなく、その過程をも表示することが出来るのであって、世界認識の有力な手段をなすものである。（二一七—一八ページ）

以上のライプニッツの哲学を簡単に要約すれば次のようになるであろう。

(1) 世界の基本は「モノアド」である。

(2) この「モノアド」は混沌とした物質の状態にあるものから感覚や記憶をもつものへ、さらには魂とか精神をもつ状態をへて最高、完全な「モノアド」にいたる。この完全な「モノアド」が神である。無生物から生物へ、植物や動物の發展という存在するものの發展の見地がここにある。

(3) 世界はこの神からの流出であり、神の被造物である。

(4) 最高の「モノアド」以下の「モノアド」はみな不完全であり、このため世界には欠陥があり、悪や不幸が生ずる。

（悪や不幸の承認）

(6) しかし、神はそれでも世界をもっとも良きものとして創造した。（神の恵の承認、オプティミズム）  
(6) 世界には飛躍というものはなく一系列の連続的發展（「連続律」）があるだけである。

(7) 真理には二種類がある。一つは「理性の真理」（論理の必然性による理性そのものの真理、デカルトの「生得観念」に通ずる）であり、もう一つは「事実の真理」（例えば自然科学の真理）である。

カントが神の創造した予定調和的な合理的な楽天的なライプニッツとその弟子ヴォルフの理論に対し批判的となり、彼自身の哲学をうちたてる方向に向かったのは一七七〇年頃といわれている。彼がライプニッツ・ヴォルフ流の合理的形而上学の考え方の枠から離れて、このような考えに疑問を抱くようになった。その背景について古田光教授は次のように述べている。

「カントのこうした主張が出てきた背景には、根本的には、近代における自然科学のめざましい発展という事実がある。しかし、より直接的な衝撃としての、この自然科学の發展を背景として展開されつつあった、イギリス経験論哲学の立場からの合理的形而上学批判をあげねばならないであろう。十八世紀に入って、ヒュームら経験論者たちは、人間の認識は経験なしには成り立ちえないとする立場から、形而上学が取り扱っているような経験を超越したることについての認識は不可能である、という主張を強めつつあった。カントは、そうしたヒュームの著作を読んでこれまでの『独断の夢をさまされた』（『プロレゴメナ』）と告白している。彼は、経験論者の批判を受け入れて、従来大陸の合理的形而上学が『独断論』にすぎなかったことを承認し、そうした状態から脱却するためには、まず『人間理性』が自己自身の能力と権限を吟味しなおすことからはじめねばならないということを承認したのである。」

『哲学の名著、十三選』、学陽書房、一九七二年、一一三ページ）

カントがライプニッツ説にたいする疑問をいだくようになったのは、ヒュームの懐疑論のほかにフランスのルソーの思想が多分に彼に影響を与えたといわれている。カント自身は、この二人の影響を深く認め、自己の「独断の眠り」はこの両者によって醒まされた」と述懐している。そこで簡単にヒュームの経験論とルソーの「人間性の尊重」という思想についてふれておこう。

ヒューム (David Hume, 1711~76) は認識はすべて経験から生ずるものであり、したがって経験を超えてそれ以上認識しようというのは誤りであるという。

ヒュームは徹底した不可知論者であった。彼は客観的実在はあるかないかという問題を解決できない問題とみた。彼は物自体とは何かを知ることができないばかりでなく、物そのものが存在するかどうかも分らないと主張した。彼は事物の因果的関連を自然の法則ではなく、ある現象の交代をくりかえし観察することによって成立する習慣であるとみた。すなわち物とその因果性の物質的基礎を彼は否定したのである。

ヒュームによれば因果律というのは、人間がAの現象からBの現象が引き続いて規則的に起こることを経験し、そこからAからBが必然的に生じると考えるに過ぎないのであって、そこで経験の裏づけを欠いた合理的形而上学的認識は無条件に成立しないというのである。だとするとライプニッツ・ヴォルフ哲学は無批判的な独断論にすぎなくなるとカントは考えるようになった。

しかしカントはヒュームが自然科学的認識までも、それが経験的にはその確実性を保証されない因果律を根底にして成り立っているとして否定するのにたいし、カントは少なくとも自然科学的認識の確実性を疑うことは出来ないと考えた。またカントはヒュームのいうように、人間の認識はただ対象について経験的にのみ行なわれるのなら、事物

が必然性を持ち、合目的性をもつものとして認識しうるかについては永遠に理解されなくなると考えた。そこでカントは果してヒュームの経験論的立場が正しいのかどうかを含めて人間の認識能力である理性を再検討しなければならぬとし、同時に形而上学が果して可能かどうかという問題に解答を与えようとした。結局後にみるようにカントは、ヒュームの不可知論を継承したが、「物自体」という全く抽象的な概念を成立させたいので、この「物自体」の存在を承認する哲学を成立させることになったのである。

次にカントはルソー（J. J. Rousseau, 1712～78）からすべての人間の人間性を尊重するという思想を学んだ。カントはルソーの『エミール』（一七六二年）の出た翌年に出版した『美と崇高の感情についての考察』のための『覚え書』のなかで「私自身は生れながらにして一学究である。私はただ知りたいという渴望と、もっと知りたいという好奇的な躁と、或いは一つ一つ知ることのできた時の満足を感じている。私には知ることだけが人間の誇りである信じ、何も知らない民衆を軽蔑していた時代があった。ルソーは私を正道へ戻してくれた。今までの盲目的な思い上がりは消え、私は人間を尊敬することを学ぶ。もしこういう考えこそ他のすべての人に、人間としての権利を回復する価値を与えるものであることを私が信じなかつたら、私は平凡な労働者よりも無用となるだろう」と書き、「人間のさまざまな仮りの姿の間に深く隠された人間性を、ルソーが初めて発見した」と述べている。

カントはルソーから学問的認識以前の自然のままの自立的人間とは何であるかを教えられ、人間は人間として本来生まれながらにすべて平等であるということを学んだ。そしてライプニッツ・ヴォルフ哲学による合理的形而上学について疑問をもちはじめた彼は、この立場からは十分な道德論を展開できないという感じを深め、そのようなときルソーの思想にふれ、カントは人間の自然的感情を重視するルソーの思想によるならば、道德的な基礎づけを与え



ることができると自覚したのである。こうしてカントは一方ではヒュームから、他方ではルソーによって触発されて彼自身の批判哲学を生み出す道へ進んだのである。

カントはヒュームやルソーに啓発されて理性を批判的に検討するようになったが、その目的はヒュームのように知識の確実性にただ疑いをかけるのではなく、科学的知識が信頼に価いすること、「形而上学の全面的な革命を企てる」ことによって、形而上学を「学問の確実な道にもたらず」ことであり、このためカントは新たな形而上学の確実性を保証する試みに没頭するようになった。その際カントは新しい形而上学を自然科学的認識と対立するものとは考えず、「形而上学の全面的な革命」はむしろ「幾何学者や自然科学者を模範として」行わるべきであると考えた。

こうして、彼の批判哲学といわれるものが、そのご『純粹理性批判』（二七八一年）、『学として現われ得べきあらゆる将来の形而上学に対する序論』<sup>プロレグメナ</sup>（二七八三年）、『実践理性批判』（二七八八年）、『判断力批判』（二七九一年）を主著として説かれたのである。普通カントの思想發展上の区分として『純粹理性批判』までを、批判前期とし、それ以後を批判後期としている。

#### 四 批判前期のカント

このようにカントは、一方で当時のドイツ思想界の主流であった啓蒙主義をイギリスおよびフランスの近代市民哲学を吸収することにより批判、克服、発展しようとはかり、またこのことによって大陸の合理論とイギリスの経験論の総合という形で、認識論と道徳思想を通じて、新たな近代哲学の確立を意図したのである。この点について久保陽一氏はの次ように述べている。

「まず、ヒュームによって、カントは『独断の眠りからさまされた』。というのはヒュームは、自然科学や合理論的形而上学が確かなものとして前提している因果律の妥当性を経験論の立場から疑ったからである。ヒュームによれば、因果律というのは、実は、人間があるAなる現象から別のBなる現象がひきつづいて規則的に起こることを経験してきたことから、AなるがゆえにBが生じるというように考えてしまい、そこに客観的必然性を認めようとすることから生じてきたが、実際は、それは客観的必然性しか持ちえない習慣といったものである。もし、そうだとすれば、自然科学はともかく、経験の裏づけを欠いた合理論的形而上学の認識は無条件には成立しえないことになるだろう。このことから、カントはライプニッツ・ヴォルフ哲学は無批判的な独断論であると認めるようになったのである。

また、カントは、ルソーからは、すべての人間の人間性を尊重するという思想を学んだと思われる。カントがルソーの『エミール』を読み耽って日課の散歩を忘れてしまったという話は有名であるが、ルソーは、そこで、言葉や学問的認識以前の自然で自立的な人間の感情の育成を重視し、この点において、人間はほんらいすべて平等である、という思想を説いているからである。もとより、カントは、ルソーほどに自然的道徳的感情を人間の道徳性にかんして第一義的なものと考えはしなかった。また、カントのうちには、すでに、敬虔主義によって人間性への尊重の感情が芽生えていたことは否めず、この意味でルソーの思想がカントにとってまったく異質的であったとはいえない。しかし、いずれにせよ、カントはルソーによって従来の合理主義的立場では充分な道徳論を説きえないことを自覚したと思われる。

だが、カントはライプニッツ・ヴォルフ流の合理論的形而上学を認められなくなったからといって、他方、ヒュー

ム等の批判をそのまま受け容れることもできなかった。というのは、カントは、すくなくとも自然科学的認識は絶対に確実な認識であると信じていたからである。また、カントは理性による形而上学的要求を自己のうちに否定し、それができないと考え、そこで、批判に耐えうる新たな形而上学を求めざるをえなかったからである。

こうして、カントは、当時ドイツ思想界を支配していたドイツ啓蒙主義を、イギリスおよびフランスの近代市民哲学を摂取することによって、その独断の眠りからさまし、そこから、両者の対立の批判的調停を、すなわち、通常大陸合理論と英国経験論の総合といわれる新たな形而上学の方に求めていくのである。それによって、カントは、さきに指摘したような、近代哲学の自覚と『克服』の端緒を切り開いたのである。〔『原典が語る哲学説の歴史』一七一—三ページ〕

ではそれはどのように展開されたであろうか。

カントは十一年間の沈黙のうちに発表した『純粹理性批判』において彼の批判哲学の基礎を与えた。彼は、哲学は三つの根本問題、すなわち、「(1)私は何をどこまで知りうるか」、「(2)私は何をなすべきか」、「(3)私は何を希望する」とが許されるか」にまとめられるとし、そして、それらが「(4)人間とは何であるか」という根本問題の解答になると考えた。

カントは『純粹理性批判』でまず感性の先天的形式から考察し、次で悟性の先天的形式に移り、更に感性と悟性の共働による判断作用を論じ、最後に判断の究極的統一作用（先験的弁証法）を考察する。カントの『純粹理性批判』は原著第二版八八四ページという大部の書物であるから限られた紙数でその内容を紹介することはきわめて困難である。

次に『純粹理性批判』の目次の篇以上を掲げておこう。

緒言

I 先験的原理論

第一部門 先験的感性論

第二部門 先験的論理学

第一部 先験的分析論

第一篇 概念の分析論

第二篇 原則の分析論（判断力の先験的理説）

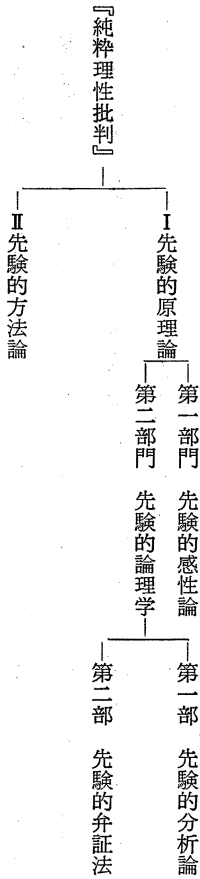
第二部 先験的弁証論

第一篇 純粹理性の概念について

第二篇 純粹理性の弁証的推理について

II 先験的方法論

右の目次によれば『純粹理性批判』の全体的構成は次のようである。



カントはのちに『論理学、講義のための教科書』（一八〇〇年）のなかで、(1)から(3)の問いに答えることが結局は「(4)人間とは何か」という問いに答えることになるのであり、すべて哲学は「人間学」である、という趣旨を述べている。

そして、カントがまず第一の問い「私は何をどこまで知りうるか」に答えたのが『純粹理性批判』であった。カントは第一版の序文で次のように述べている。

「人間の理性は、或る種の認識について特殊の運命を担っている、即ち斥けることもできず、さりとてまた答えることもできないような問題に悩まされるといふ運命である。斥けることができないというのは、これらの問題が理性の自然的本性によつて理性に課せられているからである。また答えることができないというのは、かかる問題が人間理性の一切の能力を越えているからである。」(篠田英雄訳、岩波文庫、(上)一三三ページ)

理性はその自然的本性に従つて或る種の認識に向うが、そのためには証明することのできない条件をもうける。そして条件から条件へと一系列の条条件を遡つて高く昇っていく。こうして問題はいつになつても尽きることがなく、理性はこのような仕方ですつまでも不完全な領域にとどまらざるを得ないということに気づくことになる。

「かつては形而上学が諸学の女王と称せられた時代があった。もし意志をそのまま行為と解するならば、形而上学はその対象が著しく重要なところから、かかる尊称を受けるにふさわしいものであった。ところが今日では、形而上学にあらゆる軽蔑をあからさまに示すことが、時代の好尚となつてしまった。」(同上二四ページ)

「そこで理性は、一切の可能的な経験的使用を越えるにも拘らず常識とすら一致するほど確実に見えるような原則に逃避せざるを得なくなる。ところがそのために理性は、昏迷と矛盾とに陥いる、そしてなるほどこららの昏迷と矛

盾とから、どこかに隠れた謬見が根底に潜んでいるに違いないことを推量しはするものの、しかしこれを発見するところができないのである。理性の用いる原則は、一切の経験の限界を超出しているので、経験による吟味をもちや承認しないからである。この果てしない争いを展開する競技場が即ち形而上学と名づけられているところのものである。」（同上二三四ページ）

こうしてつい先頃までは、最も大いなる權威を保持していた理性は、すべての人の見離す存在にその地位を低められ、懷疑論者たちによって否定されるに到る。そして人間理性は多くの人々によって、学問の世界において無関心という最悪の状況に追い込まれてしまった。

しかし「実際、人間の自然的本性にとって無関心でいられないような対象に関する研究に、どれほど無関心を装ったところで無益である。自分は形而上学に対して無関心であると称する人達が、いくら学問的な用語を通俗的な調子に改めて、自分の正体をくらまそうとしてみたところで、とにかく何ごとかを考える限り、彼等がいたく侮蔑していたところの形而上学的見解に、どうしても立ち戻らざるを得ないのである。」（同上二五ページ）

「言うまでもなくこの無関心は、軽薄な念慮から生じた結果ではなくて、もはや見せかけの知識に釣られていない現代の成熟した判断力の結果であり、また理性のあらゆる任務のうちで最も困難なわざであるところの自己認識に新らたに着手し、そのために一つの法廷を設けよ、という理性に対する要請なのである。即ちこの法廷は、理性の要求が正当であれば理性を安固にし、これに反して根拠のない不当な要求は、これを強権の命令によってではなく、理性の永久不変な法則によって棄却し得るのである。そしてこの法廷こそ純粹理性批判そのものにほかならない。」（同上二五六ページ）

ではこの純粹理性の批判とは何であろうか。カントは次のように答える。

「しかし私がここに言うところの批判は、書物や体系の批判ではなくて、理性が一切の経験にかかわりなく、達得しようとするあらゆる認識に関して、理性能力一般を批判することである。従ってまたこの批判は、形而上学一般の可能もしくは不可能の決定、この学の源泉、範圍および限界の規定ということにもなるが、しかしこれらのことはいずれも原理に基づいてなされるのである。」(同上二六ページ)

(3) 坂部恵氏は「批判」の語義について次のように書いている。

『批判』[独] Kritik は、元来、『危機』[独] Krisis などと同じく、ギリシヤ語の『分離する』を意味する動詞 krino に由来する言葉であり、したがって『理性批判』とは理性を理性ならざるもの、非理性から分離する作業にほかならない。カントは、近代的理性の底にまで下り、理性ならざるものに身をさらし、理性の解体せんとするぎりぎりのふちに立つことによつて、よくこの根底的な『分離』の作業をなしたのであった」(『現代哲学事典』、講談社、一五四―四ページ)。

ここに批判の眞の意味が述べられている。批判とは眞なるものと眞ならざるものを分離することであつて、マルクスの『経済学批判』の場合も同様である。

「そこで私は、これまで手をつけられずにいた批判というこの唯一の道をとリ、従来理性がその超經驗的使用のために自分自身といわば不和を醸す原因となつていたところの一切の謬見を除去する手立てが、この道によつて発見せられたことを、心ひそかに喜んでゐる次第である。私はこの場合に、人間理性の無力を口実にして理性の諸問題を回避するようなことをしなかつた。むしろ私は、これらの問題を原理に従つて遺漏なく枚挙し、また理性が自分自身について誤解している点を発見した上で、かかる問題を理性に十分満足のいくように解決したのである」(同上二七ページ)

カントによれば、ヒュームの経験論の誤りは、人間の認識能力のうちに先見的形式があり、これによって先天的総合判断が可能になるということを理解しなかったことであり、このため彼が形而上学のみならず自然科学の確実性までも疑ったことである。

では、カントの「先天的総合判断」はどのように可能となるのであろうか。古田光教授は次のように述べておられる。

「それでは、カントは、本書『純粹理性批判』において、人間理性の認識能力を吟味するという問題に、いったいどのような立場から、どのような方法で立ちむかおうとしたのであろうか。

カントは、まず、われわれの認識がすべて『経験とともに始まる』ことは確かだが、それは必ずしも、経験論者が主張しているように、すべての認識が『経験から生ずる』ということの意味しなからあろう、と考える。なぜなら、たんなる経験（感覚的印象）がわれわれに与えるものは、認識が成立するための素材としてのばらばらな事実にすぎず、それだけでは不十分と考えられるからである。こうした見地から、われわれの認識というものは、感覚的印象によって与えられる素材・質料（materie）に対して、われわれの認識能力が自らのなから取り出した先天的（ア・プリオリ）な形式・形相（Form）を与えることによってのみ成立しうるものであろう、と考える。そして、もしこのように考えうるとするならば、われわれは、これまでの『認識が対象にしたがわねばならない』という考え方を捨てて、『対象がわれわれの認識に従わねばならない』（B, XVII）と考えなおすべきであらう、と主張する。

こうした考え方の転回が『カントにおけるコペルニクスの転回』とよばれているものであり、これを通して打ち出された、新しい認識論上の立場が『先天的観念論』（または『形相的観念論』）とよばれている立場である。それは、簡



単に言えば、われわれが認識しうるものは、われわれの経験に現われうるかぎりのもの（『現象』）をわれわれの認識のはたらき（主観の先天的形式）によって構成したものであって、われわれの認識のはたらきから独立に、それ自体として存在していると考えられるもの（客観的實在・『物自体』）ではない、と考える立場である。こうした立場から、カントは、一般にわれわれの認識の確實性（普遍性と必然性）を保証するものは、その先天的・形式的な部分、すなわちわれわれの認識能力のもつ先天的形式によって構成されている部分にあると考える。そして、われわれの理性のもつこうした先天的・形式的な構成能力を吟味することを通して、自然科学的認識の確實性を基礎づけるとともに、形而上学的認識の可能性を吟味しようとしたのである。こうした意味での人間理性の認識能力の吟味こそ、カントが『純粹理性批判』で立ちむかおうとした課題なのであり、カントは、この課題を、『いかにして先天的総合判断は可能であるか』という形で示している」（前出『哲学の名著』一一六七ページ）

カントは『純粹理性批判』第二版で「コペルニクスの転回」について次のように述べている。

「いったい形而上学において、学としての確實な道がこれまで見出されなかった理由はどこにあるのだろうか、その道を発見するのは、或は不可能なのではあるまいか。自然が、理性の果すべき最重要事の一つとしてこの道を辿り続けるという休らいのない努力を我々の理性に課したのは、いったいどういうわけなのだろうか。そればかりでない、もし理性が、我々の知識欲の求めてやまぬ最も重要な事柄の一つにおいて我々を見捨てるばかりでなく、幻像を掲げていかにもまことしやかに理性を釣っておきながら、ついにそれが欺瞞に終るとしたら、我々が我々の理性に信頼をおく理由は殆んどないと言ってよいではないか。それともこれまでの道が間違っていたというなら、我々が新たに行くべき道を探して先人よりも仕合せになるためには、どんな指示に頼ったらよいのだろうか。

そこで私は、次のようなことをしてみたらどうかと思うのである。それは——数学と自然科学という実例は、いずれも突如として起こった革新によって、現にあるところのものになったのであるが、この二つの実例は甚だ顕著だと言える、そこで我々はこれらの学に大きな利益を与えたところの考え方の変革に存する本質的な点を精考し、また形而上学が数学および自然科学と同じく理性認識であるという事情にかんがみて、この両学と形而上学との類比が許す限り、形而上学において少なくとも試みに数学および自然科学を模倣してみたらどうか、ということである。我々はこれまで、我々の認識はすべて対象に従って規定されねばならぬと考えていた。しかし我々がこのような対象に関して何ごとかをア・プリオリに概念によって規定し、こうして我々の認識を拡張しようとする試みは、かかる前提のものではすべて潰え去ったのである。そこで今度は、対象が我々の認識に従って規定せられねばならないというふうに規定したら、形而上学のいろいろな課題がもっとうまく解決されはしないかどうかを、ひとつ試してみたらどうかだろう。形而上学では、ア・プリオリな認識、つまり対象が我々に与えられる前に対象について何ごとかを決定するような認識の可能が要求されている、ところがいま述べた想定はすでにそれだけで、かかる認識の可能ともずっとよく一致するのである。この事情は、コペルニクスの主要な思想とまったく同じことになる。コペルニクスは、すべての天体が観察者の周囲を運行するというふうに想定すると、天体の運動の説明がなかなかうまく運ばなかったため、今度は天体を静止させ、その周囲を観察者に廻させたらもっとうまくいきはしないかと思つて、このことを試みたのである。ところが形而上学においても、対象の直観に関しては、これと同じような仕方を試みることができる。もし直観が、対象の性質に従って規定されねばならないとすると、私はこの性質についてどうしてア・プリオリに、何ごとかを知り得るのか判らなくなる。これに反して（感官の対象としての）対象が、我々の直観能力の性質に従って規定され

るといふのなら、私には直ちにこのことの可能がよく判るのである。しかしかかる直観が認識になるといふのだと、私は直観にとどまっているわけにいかない、そこで私は表象としてのこれらの直観を、対象としての何か或るものに關係させ、対象をかかるとして規定せねばならない。そうすると私は、対象の規定に関して二通りの仕方だけを想定することができる。第一は、私が対象を規定するに用いる概念は、やはり対象に従っている、といふふうに想定することである。しかしそうなると私は、この対象に関して何ごとかをア・プリオリに知る仕方について、またしても前と同じ困惑に陥ることになる。そこで第二に、対象或は経験——と言っても、対象（与えられた対象としての）は経験においてのみ認識されるのだから結局は同じことになるが、要するに対象或は経験が、これらの概念に従って規定されるといふふうに想定すれば、私は問題をもっと楽に解決する方法がここにあることを、直ちに知るのである。つまり経験そのものが認識の一つの仕方であり、この認識の仕方は悟性を要求するが、悟性の規則は、対象がまだ私に与えられない前に、私が自分自身のうちにこれをア・プリオリに前提していなければならぬ。そしてかかる悟性規則はア・プリオリな悟性概念によって表現せられるものであるから、経験の一切の対象は、必然的にかかるとして悟性概念「カテゴリー」に従って規定せられ、またこれらの概念と一致せねばならない、といふことである」（訳、前出（上）三二—四ページ）

カントはここで対象が認識主観に従って規定されているといっているが、しかしそれは、デカルトやバークリーの「経験的観念論」のように、対象の現実的存在を疑ったり、あるいはまたそれを否定して、すべては認識主観の産物であるにすぎないなどといっているのではない。そうではなく、「物自体」はたしかに認識主観にかかわりなく存在するものとして考えられるが、しかし、有限な存在者である人間にとってはそれは認識しえず、ただ認識主観の

先天的な諸条件によって構成された経験の対象として、すなわち「現象」として現われてくるのでしかないということの意味しているにすぎないのである。

さて、カントは以上のように感性と悟性の働きを認めているが、そのいずれにも先天的な認識があると考ええる。人間の認識はまず感性によって対象の直観的表象を受け取ることから始まる、とカントもそれ以前の哲学者と同様に考えた。しかし、彼の哲学の特質は、こうした受容性の能力としての「感性」のもつ先天的形式を主張する点である。これが「先験的感性論」である。カントによれば、感性は受容性の能力ではあるが、与えられた多様な直観的表象を秩序づけてゆく形式を、自己自身のなかに先天的にそなえている。感性の先天的認識形式は空間と時間である。空間と時間とは、われわれの感性から独立に存在しているところの「物自体」のもつ性質ではなく、われわれの感性的直観のもつ形式＝主観の形式である。われわれの経験に現われるすべての現象はこの形式によって秩序づけられる。したがって、空間と時間は、主観の形式としての「先験的観念性」と同時に、現象の形式としての「経験的実在性」をもっている、とカントは言う。

それ故、カントの主観的認識論の目的は、それまでの形而上学のように対象それ自体を実在的なものとして捉えることにあるのではなく、人間にとって認識可能な「現象」としての対象と認識不可能な「物自体」との間の限界をはっきり認め、その限界を越えることができないことを明確にすることであった。

このようなコペルニクスの転回によって、先の理性の問い——人間は何をどこまで知りうるか——は、『純粹理性批判』で次の二点において答えられている。第一に、ヒュームの懐疑論に対してニュートンなどの数学および自然科学の普遍的必然的認識を守り、その可能性の条件、根柢を明らかにする〔先験的感性論〕Die transzendentale Ästhetik,

「先験的論理学」Die transzendente Logik)。第二に、この条件に適わぬライプニッツ・ヴォルフ流の独断論的形而上学を吟味し、否定する〔先験的弁証論〕Die transzendente Dialektik)。

カントは、以上のような自己の哲学史上におけるコペルニクスの転回の成功について、次のようにみずから確言している。

「この試みは、我々の希望通りの成功を収めて、形而上学の第一部門に一個の学としての確実な道を約束した。形而上学は、この第一部門〔先見的感性論〕でア・プリオリな概念を論究するが、これらの概念に対応しかつ適合する対象は、経験に与えられ得るのである。我々は上に述べた考え方の変換によって、ア・プリオリな認識の可能をまことに工合よく説明できるし、そのうえ経験の対象の総括としての自然の根底にア・プリオリに存するところの法則に、十分な証明を与えることができるからである。そしてこの両つことは、これまでの方法だとまったく不可能であった。」(同上三五ページ)

こうして、カントは『純粹理性批判』で新しい形而上学を樹立するという課題に対して、合理論と経験論の批判的調停を通して基礎的な解答を与える。

カントはまず数学および自然科学の基礎づけ(先天的総合判断)として、数学および自然科学の認識が普遍的必然性を持ち、客観的に妥当しうる根拠についての問いを、「先天的総合判断はいかにして可能か」と提起する。というのは、学問的認識は、カントによれば、何らかの原則的判断、たとえば物理学において「物質の同一量は常住不変である」というような判断に基づいている。だが、判断は、一般に、一方で主語の概念のうちに含まれているものだけを述語として述べる分析的判断と、主語の概念には含まれていない別のものを述語として付け加える総合的判断とに分

けられる。分析的判断を可能にするのは先験的感性であり、分析的判断は主語の概念のなかに述語の概念があらかじめ含まれている判断である。たとえば「物体はすべて括がりをもつ」という判断がそれである。物体という概念それ自体が括がりをもっているので、まったく経験の助けを借りなくとも判断が下せるのである。このような分析的判断とよばれるのは悟性の働きである。たとえば、「 $1+5=6$ 」とか、「直線は二点間の最短距離である」という判断である。これらは主語のなかに述語の概念が含まれておらず、しかも普遍的で必然的な判断、すなわち先天的総合判断である。カントはこうして数学および自然科学において先天的総合判断が確実に存在することを認める。

判断はまた、経験に源泉をもつ「経験的判断」と経験から独立な「ア・プリオリな（先天的な）判断」とに分けられる。単なる分析的判断は同語反復にすぎず、認識を新たに発展させるものではない。また、経験的判断は総合的ではあっても、ヒュームが示したように、普遍的必然性をもちえない。そこで、先天的であると同時に総合的な判断だけが確実な認識だということになる。カントは次のように問う。

「すると純粹理性の本来の課題は、『ア・プリオリな総合的判断はどうして可能であるか』という形の問いに含まれていると言つてよい。

形而上学がこれまで非常に不確かで矛盾の多い状態を続けてきた原因は、哲学者達が如上の課題はもとより、恐らく分析的判断と総合的判断との区別にすら、もっと早く思いつかなかったところにある。……

上記の課題を解決すれば、その解決は、対象のア・プリオリな理論的認識を含むところのすべての学の基礎を確立し、またこれらの学を完成するために純粋な理性使用が可能であることも——換言すれば、次の問題に対する解答をもまた同時に包括することになる、

純粹数学は、どうして可能であるか

純粹自然科学は、どうして可能であるか

純粹数学にせよまた純粹自然科学にせよ、いずれも実際に存在しているのであるから、これらの学がどうして可能であるかと問うのは、甚だ当を得たことである。かかる学が可能でなければならぬということとは、それが現実に存在しているという事実によって証明されるからである。」(訳、前出(上)七三—五ページ)

カントによれば、この先天(驗)的総合判断はどのようにして可能であるかという課題を解決するためには、われわれの認識能力が現実に際してどのような先天的形式をもっており、われわれはどのような仕方に対象を認識しているのかということが検討されなくてはならないというのである。カントは人間の認識は対象を感受する能力である感性と対象を思惟する能力である悟性ととの共働によって成立するとしている。この二種類の認識能力は、周知のように、プラトン以来のヨーロッパ形而上学において、二つの基本的認識能力として位置づけられていた。前者は感覺的認識能力であり後者は概念的・推論的認識能力として規定されているが、カントの『純粹理性批判』はこの人間悟性についてのもっとも根源的な、包括的な説明であるといわれている。

すなわちカントはすでにみたように「先験的感性論」を第一部門で取り扱い、「先験的方法論」を第二部門で取り扱ったわけであるが、そこでカントが展開した哲学は徹底した二元論的觀念論であった。

ヘーゲルが世界史は絶対精神の自己展開とみたのに対し、カントは感性と悟性の先天的認識形式によって事物が認識されると説く。『純粹理性批判』で展開されたカント哲学の内容の紹介と、それに対するマルクスレーニン主義からの批判については別稿でみることにする。